



子どもたちに「居場所」を与える こどもソーシャルワークセンター



幸重さん(下段中央)と一部のスタッフ・ボランティアたち

しつけるのではなく 褒めて伸ばす

子どもと接する上で気を付けているのは、しつけようとしなないということだそう。その代わりに、良いことをしたときは思いっきり褒める。些細なことにもそういったリアクションを取ることで、褒められた本人はもちろん、それを見ていた周りの子どもにもいい影響が及ぼされるという。そのような日常を繰り返す中で、子どもたちに変化が見られるようになる。

「例えば、はじめは大人しかった子がちょっとしたわがママを言うようになる。それがとても嬉しいんです」と幸重さんは笑みをこぼす。自然体でいられるようになった証拠だという。他愛もない会話の中で、子どもたちは徐々に心を開き、悩みを話してくれるようになる。

目指したのは 一人ひとりと向き合うこと

滋賀県大津市にあるこどもソーシャルワークセンターは、様々な事情を抱える子どもたちに居場所を与える活動をしている。この活動は、同センター代表の幸重忠孝さんの「福祉や教育の救済の手からこぼれ落ちてしまう子たちを町の中で救いたい」という思いから始まったものである。

センターでは、子ども一人ひとりと向き合うことを大切にしている。夕食を取りながらアットホームな雰囲気でお話を楽しむ「eatalk」や、学校に息苦しさを感じる子が日中を安心して過ごせる場所の「『ほっ』とる一む」など色々な取り組みがある。

これらの共通点は、大人が子ども一人ひとりにしっかり目を配れる規模で行われているということである。子ども一人に対して多くの大人が関わる環境で、コミュニケーションに重点を置いた交流を行う。

「そうなんだ」の先のアクション

「まずは困っている子どもたちが存在していることを知ってもらいたい」と幸重さんは語る。そして、「こういった活動を他人事として捉えるのではなく、自分も何か行動を起こしてみしてほしい」と話した。活動をしている団体のボランティアに参加することや、周りの人にそのような団体があると情報を広めること。私たち学生にもできることはたくさんある。

一人ひとりの小さなアクションが、子どもたちを取り巻く社会をより良い方向へと変えていくのだ。



センターの外観

取材先 NPO法人 こどもソーシャルワークセンター 代表 幸重忠孝さん

2012年4月1日、京都市山科区四ノ宮にて幸重社会福祉士事務所を設立。2016年4月に現在の滋賀県大津市観音寺に移転。記事内で紹介した取り組みのほかに、外部の団体ともネットワークを作り様々な活動を行っている。



取材者

立命館大学 薬学部 1回生

中原 真愛

滋賀大学 経済学部 1回生

吉田 葵